

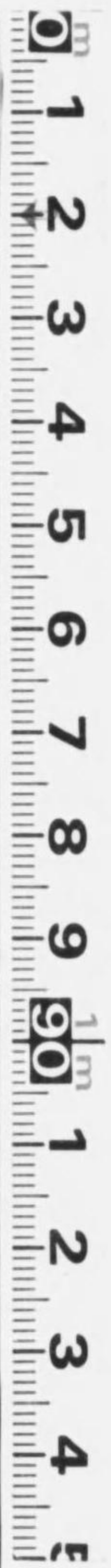
大阪毎日新聞社事業概要

特250

9

908

9



始



持250
908

昭和四年五月



大阪毎日新聞社事業概要



目次

一、沿 革	一
二、本社の刊行物	二
三、地 方 版	四
四、資本金、土地建物	五
五、組 織	七
六、通信機關	八
七、設 備	一〇
八、營業狀態	一四
九、社會奉仕	一九
一〇、本年の新事業	二三
一一、本社關係の二大事業	二四
一二、役員、職員	二六

大阪毎日新聞社事業概要

一、沿革

大阪毎日新聞は初め大阪日報と稱し、明治九年二月二十日の創刊にかゝる。明治十五年二月一日日本立憲政黨新聞と改題し、純然たる政治新聞となり、ついで明治十八年九月一日大阪日報の名に復せしが、明治廿一年十一月廿日大阪の有力なる實業家等、資を醸して匿名組合を組織し、これを譲り受け、主筆に東海散史柴四朗を迎へ、また改題して初めて大阪毎日新聞と稱せり

明治廿二年五月台水渡邊治、高木喜一郎東京より招かれて柴等と交代し、大阪毎日新聞は實業の機關たるを公言して政黨新聞の圏外に立てり

渡邊治、社長となりて大に創業の才を揮ひ、その歿後高木喜一郎ついで業務擔當社員となり、盛に人材を集め、前外務次官原敬を迎へて編輯總理となし、ついで社長に推薦す。

卅二年増資して合資組織に改む。高木の病を得て職を辭するや、本山彦一、藤田組より出で、業務を擔當す。明治卅三年原敬退社し、前内務次官小松原英太郎、迎へられて編輯總理となり、ついで又社長となる。明治卅六年十一月小松原その職を辭するや、本山ついで社長となり、皇室中心主義を奉じ、不偏不黨、獨立獨行を標榜して自來その經營に任ず

明治卅九年十二月東京において姉妹新聞として電報新聞を譲り受け、これを毎日電報と改題し、ついで同四十二年二月さらに東京日日新聞を買収して毎日電報をこれに併合し、東西相應じて通信聯絡の完備を期し、これより勢力俄然として増進するに至れり

大正四年十月夕刊を發行し、また從來存せし京都、兵庫兩附録の外、地方讀者のため新たに地方版を創始せり

大正八年三月從來の合資組織を改めて株式會社と爲す

二、本社の刊行物

大正十一年四月新社屋落成してこれに移り、記念としてサンデー毎日および英文大阪毎日を發行し、また同年五月點字大阪毎日を創刊せり。英文大阪毎日は邦人の手によりて刊

行せらる、我國唯一の外字新聞にして、國際的立場に立ちて公正なる批判を試み、國民の輿論ならびに我國の眞情を率直に外人に紹介するをもつて特色とす。點字大阪毎日は薄倅なる盲人に對する奉仕的事業にして、人類愛の理想のもとに文化の指導者をもつて任ず

大正十一年十一月西部毎日を關門支局より發行し、母紙に添付して九州、山口および鮮滿讀者に頒つこととし、その翌十二年三月また雜誌エコノミストを發行して實業家の指針となす。即ち現在の定期刊行物左のごとし

大阪毎日新聞社の定期刊行物

- 一、大阪毎日新聞 日刊 大阪本社
- 一、東京日日新聞 日刊 東京支店
- 一、サンデー毎日 週刊 大阪本社
- 一、英文大阪毎日及東京日日 日刊 大阪本社
- 一、點字大阪毎日 週刊 大阪本社
- 一、西部毎日 日刊 關門支局

右の外、大正九年以來毎日年鑑を發行し、最近またスポーツ年鑑を發行す。臨時出版として、聖上陛下なほ東宮にお在します時の御渡歐記念御寫眞帖、ならびに同御外遊記を始めとし、勞農露國研究叢書および露亞經濟叢書の如きあり、秘籍珍書大觀また將に第二期刊行を終らんす。その他大阪文化史、自習用全科辭典、國定點字教科書等有益なる書籍の刊行三百餘種に上れり

三、地方版

大阪毎日新聞は明治三十三年以來、神戸、京都、滋賀地方に地方附録を發行し、母紙に添付し來れるが、さらに大正四年十月夕刊發行の前後より、東京日日新聞に各地方に地方版を創始し、西部毎日またこれに倣ひて、今や地方附録ならびに地方版の數、實に五十種の多きに達せり。その名稱左の如し

京都毎日、滋賀毎日、神戸毎日、兵庫毎日、中京毎日、大阪市内版、大阪府下版、阪神版、奈良版、和歌山版、三重版、岐阜版、福井版、石川富山版、山陰版、岡山版、

廣島版、香川愛媛版、徳島高知版、地方綜合版（以上二十種大阪毎日）

山口版、福岡版、北九州版、長崎佐賀版、熊本大分版、鹿兒島宮崎沖繩版、朝鮮北部版、朝鮮南部版（以上八種西部毎日）

東京府下版、横濱横須賀版、神奈川版、静岡版、遠州版、千葉版、房總版、埼玉版、群馬版、茨城版、栃木版、福島版、山形版、山梨版、信州版、南信版、新潟版、秋田版、宮城版、岩手版、青森版、北海道樺太版（以上廿二種東京日日）

四、資本金、土地建物

資本金 資本金は大阪毎日新聞を改題せし明治廿二年頃には五萬圓にて、拂込貳萬五千圓なりしが、事業の發展に伴ひ、漸次拾萬圓となり、參拾萬圓となり、五拾萬圓となり、百貳拾萬圓となり、貳百五拾萬圓となり、五百萬圓となり、昭和三年十二月には壹千萬圓となり、現在の拂込金額は六百貳拾五萬圓なり

土地建物 本館は大阪市堂島にありて、敷地一千百八十六坪、建坪九百五十坪、延建坪三千七百五十八坪、地下階より露台まで七階、その上部小塔四階あり。様式は近世復興式

にして、全部鐵筋もしくは鐵骨コンクリートをもつてし、大体階下は食堂、浴場、配電室、汽罐室、工場、印刷場下部、原料紙貯藏庫、諸倉庫にあて、一階は營業局、印刷場、鉛版場、遞送場。二階は編輯局、主幹室、社賓室、重役室、活版場、圖書室。三階は大小會議室、社長室、貴賓室、婦人室、日本室、電送寫真室、寫真場、和食堂。四階は慈善團事務所、醫局、事業部。五階は貸事務室等にあつ。分工場は本館の東方半町の位置にあり、四階建鐵筋コンクリートにして延建坪四百九十九坪、主としてグラヴユア印刷、臨時物印刷、製本ならびに印刷徒弟養成所に充當す

東京支店は麴町區丸ノ内にあり。敷地一千三百十八坪、建坪六百六十五坪にしてまた同じく鐵筋コンクリートをもつてし、地下階より露臺まで七階、上部小塔三階あり、延建坪三千百四十二坪を算す、大体階下を配電室、諸機關室、印刷場下部、原料貯藏庫、諸倉庫にあて、一階を印刷場、鉛版場、修理場、宿直室、浴室、自動車室。二階を營業局、遞送室、寫真場その他小印刷室。三階を編輯局、社長室、主幹室、電送寫真室、活版場、紙型室。四階を圖書室、貴賓室。五階を大會議室に充當す、殊にその工場は最新の建築にか、り最も完備せり

この外關門支局、大連支局、京都支局、神戸支局等すでに完成され、横濱支局は目下建築工事中にあり

五、組 織

大阪毎日新聞社の役員は定款の定むるところにより取締役十一名、監査役三名（今一名缺）、内取締役は互選により社長、副社長、専務取締役を擧げ、なほ取締役中にて大阪毎日編輯主幹、東京日日編輯主幹、主筆、大阪毎日編輯總務、本社營業局長、東京支店營業局理事の事務を分擔す

大阪毎日新聞社の事業上の組織は編輯局、營業局の二大系に大別され、編輯局はさらに論說、整理、内國通信、外國通信、東亞通信、社會、經濟、學藝、校正、聯絡の各部課に分たれ、各部また二三の課を附有するあり。整理部は紙面編輯の中心をなし、そのもに政治、調査の兩課および寫眞撮影係あり。調査課は編輯に要する諸調査とともに圖書室の管理をなす。内國通信部は内地通信事務の掌理の外に、各地方版編輯整理の任に當る。學藝部は東京にありて學藝に關することを管掌し、大阪には編纂課ありてサンデー毎日の編

八
纂を擔當す。聯絡部は中央、東部、西部の三部あり、中央は大阪本社に、東部は東京支店に、西部は關門支局に所在し、ともに通信聯絡の任に當り、西部聯絡部にありては兼て西部毎日の編輯發行を掌る。その他の各部またいづれもその主管事務を掌理し、ともに編輯主幹ならびに編輯總務に統督され、また別に社論統一のために東西共通の主筆あり。この外なほ英文毎日部および雜誌エコノミスト部を置く

營業局は販賣、廣告、會計、庶務、印刷の五部に區分され、營業局長のもとに統括さる販賣部には遞送、計算の二課を附置し、なほその外に活動寫眞班あり、廣告部にはまた計算課および校正係あり、印刷部は活版、鉛版、印刷、寫眞の四工場およびグラヴユア、インタータイプ、活字鑄造、電氣、修理その他の諸係を統督す

なほこの外に祕書課、事業部、讀者相談部、地方巡察員等あり、事業部は事業、講演、運動、航空の四課に分る、また技術方面の指導監督機關として技師長を置く
東京支店東京日日新聞の組織も本社と大同小異なり

六、通信機關

大阪毎日新聞社が内外各地に設置しある通信機關はおよそ四百八十二ヶ所あり、これ等は外國、東亞、内國(本支店各別)の四通信部に分屬す。土地の状況により或は支局を設け或は通信部を置き、或は通信所となし、或は通信員を囑託す、また歐米主要都市には特派員を派遣し、或は駐在員を配置す。現在支局を設置しあるは神戸、京都、關門、名古屋、横濱、京城、臺北、福岡、廣島、松江、高松、和歌山、奈良、大津、金澤、静岡、千葉、浦和、長野、仙臺、札幌ならびに北京、上海、大連等にして、通信部もしくは通信所を設置しあるは各縣廳所在地およびこれに準ずる重要地合せて八十八ヶ所なり。ロンドン、パリ、ニューヨーク、ワシントン等の要地には特派員を置く、通信員は海外二十五ヶ所、内地三百六十三ヶ所に置く

大阪毎日新聞社は以上のごとく内外各地に通信網を張れるに拘らず、なほ米國合同通信社と特別契約を結び、世界各地における同通信社の特派員は、大阪毎日新聞社特派員として活動す。また有力なる同業者と提携して新聞聯合社を組織し、通信蒐集に遺漏なきを期し居れり

七、設 備

大阪毎日新聞社設備の主なるものを擧ぐれば左のごとし

活字と活字鑄造機 新聞紙面の印刷を鮮麗にするには常に新らしき活字を使用するを要す、大阪毎日、東京日日ならびに西部毎日に使用する活字は無慮四千五百萬個に達す。これ等はみな鑄造係において鑄造しこれを補給す、これがため本社は自動活字鑄造機廿四臺を有し、東西兩工場に分置して盛に鑄造に従ふ。また本社に使用されある七ポイント活字は特に本社の研究によりて改良されたるをもつて大毎式の名を冠せらる

紙型製作と鉛版鑄造機 精銳なる印刷機械の能力を最もよく發揮せしむるには、これに要する鉛版を速に製作して配給するにあり、こゝにおいて鉛版の製作は最も敏活ならざるべからず。大阪毎日新聞社は紙型製作にはローリングマシンを用ひ、鉛版鑄造には英國ライノタイプ會社製最新式自動鉛版鑄造機を用ふ、本鑄造機は優に一分間に鉛版三枚を鑄造し得、瞬時を争ふ新聞印刷に最も適應するものなり

印刷機械 大阪毎日新聞社は、大正十年他に率先して初めて米國アール・ホー會社より高

速度輪轉印刷機を輸入し、自來大阪本社に十二臺、東京支店に八臺を使用し來りしが、紙數の激増に伴ひさらに一層高速のものを必要とし、昭和二年特に同會社に交渉して從來世界におけるレコード八萬(四ページ紙一時間の印刷部數)を凌ぐこと四萬、實に一時間十二萬枚の印刷能力を有するもの六臺を製作せしめ、これを日本電光超高速印刷機ニッポンデンコウカクハイスピードプリンティングマシと命名し東西兩工場に配置し、さらになほ追加増設の必要を認め、本社に八臺、東京支店に三臺の製作を急ぎ、目下それ／＼据付中なるをもつて、本年中には全部の完成を見るべく、その曉には大阪本社には電光超高速機十一臺、普通高速機十二臺、計廿三臺、東京日日工場には電光超高速機六臺、普通高速機六臺計十二臺となり、印刷能力通じて一時間大阪本社四ページ二百一十一萬四千部、東京日日同百一十一萬二千部の實勢力を有すること、なる、これ等はたゞに四ページ折八ページ折を刷出し得るのみならず、各機相連接せるをもつて、時に臨んで十二ページ折、十六ページ折、また二十ページ折、なほそれ以上となる、かつ各機はみなレートニュース色刷装置を具備す

グラヴィア印刷機 大阪毎日新聞社は、大正九年他に率先してロータリー・ロトグラヴィア印刷機二臺ならびにこれに要する製版機械を米國ウエベンドルフ會社に注文し、大正十

年米人技師ジョン・スプリング・ステッド氏を聘して機械据付、製版技術の傳習を受け、初めてこれを新聞ならびに「サンデー毎日」、「芝居キネマ」その他の寫眞畫報に應用し、我國印刷界に先鞭をつけたり。本機は今分工場に設置しあり

インタータイプ 大阪毎日新聞社は大正十一年初めて英文大阪毎日を發行するに當り、その製版に要する植字機インタータイプを米國より輸入せり。インタータイプはライノタイプに改良を加へたるものにて、わが印刷様式よりいへば活字の鑄造、文撰、植字をこの機により、しかも全く自動的に行ふものなり。本社は今本機八臺を有す

電送寫眞機 大阪毎日新聞社は大正十三年獨逸コルン式電送寫眞機を社内に裝置して寫眞電送を試み、これを天下に紹介したるが、さらに昨秋御大典前、東京大阪ならびに京都間に佛國ベラン式および日本電氣會社製NE式電送寫眞機を裝置し、本社専用電話線を利用して逸早く兩御大儀の御模様を報道せり。寫眞電送の原理は寫眞版を通過する光線を、ある装置によりて電流に變へ、さらにその電流を光に變じて受寫機内に裝置しあるフィルムに感光せしむるものなり

専用電話線 大阪毎日新聞社専用電話線は、大正十二年遞信省の許可を得、實費二十七

萬圓を寄附して東京大阪間に架設したるものにて、實に東西聯絡の主要機關たり。今は寫眞電送にも併用せらる

飛行機と傳書鳩 大阪毎日新聞社は、歐洲大戰前すでに豫備海軍機關大尉岡本平を飛行術練習生として佛國パリに派遣せしが、戦後川西製作所より水上機を購入し、山階宮武彦王殿下より「春風」の御命名を忝うし、大正十三年には早くも日本一周飛行に成功し、我航空術の發達を促進せり。自來通信の聯絡に、空中寫眞の撮影に、或は航空思想の普及宣傳に努め、殊に奥丹後震災火災の際のごとき頗る目覺ましき活動をなせり。最近米國リンドバーグ大佐がニューヨーク、パリ間を横斷したると同型のライアン式NYP二型を購入して航續十三時間二千キロメートルの記録を得、また十三年式海軍機を改造して使用せり。現在所有の飛行機は右兩機のほか十年式海軍機を改造せるもの四機、ニューポール式二四型一機計七機を保有せり

なほ山上或は海上等より通信聯絡或は寫眞輸送に用ひるため傳書鳩數百羽を飼育す

寫眞製版 近時新聞紙上に寫眞の掲出頗る多きを加へ、したがつてこれが製版設備はますます充實を要す。大阪毎日新聞社は寫眞製版に要する複寫機七臺を具備す、その内最も

大なるものは新聞二ページ大なり、その他一ページ大のもの、四分の一大のものあり。製版には銅版もしくは亜鉛版の二種あり、また凸版の設備あり、製版時間は技術者の熟練により漸次短縮せられて普通小形のものには僅々數分間をもつて足る

スカイサインミクロツクサイン 英國ロンドンのサイン・コンストラクション・カムパニの製造にかゝり、昨秋御大典を迎ふるに當り、大阪毎日新聞社が率先して屋上に装置したるものにて、空の新聞、光のニュースとして當時各方面に非常の人気を集めたり。なほこれと同時にクロツクサインを本館正面に装置し、正確なる時刻の指針となす

八、營業 狀 態

發行部數 改題當時の大阪毎日新聞は發行部數未だ多からざりしが、明治廿七八年戰役において漸くその聲價を高め、同卅五年一月初めて部數十萬を超え、次で明治卅七八年戰役に際し、急速の發展を來し、四十年元旦には廿九萬部に達し、自來順調の發展をつゞけ大正十三年には壹百萬部を突破し、昭和四年元旦には百五十萬部を超ゆるの盛況を見るに至れり。また東京支店における東京日日新聞も幸運に恵まれて發展し、特に大正十二年秋

の關東大震災火災の災厄を免れたる結果、劃期的大發展を遂ぐるに至れり。今明治四十五年以降の實蹟を表示すれば左のごとし

發行部數累年表(毎年一月元旦の實數)

年 次	大阪毎日新聞	東京日日新聞
明治四十五年	二八三、四九七 _部	一〇三、一八六 _部
大正 二年	三〇七、一三〇	一二四、三二一
同 三年	三二一、四五四	一五〇、〇一四
同 四年	三九二、一〇六	一三四、〇三一
同 五年	四五五、六二〇	二七四、七七七
同 六年	五〇二、二七三	三一二、七一五
同 七年	五六四、一五〇	三五九、七四九
同 八年	五二五、一二二	三五六、七二五
同 九年	六二〇、五二二	三六八、六三六

同	十年	七〇七、一九〇	三七五、五三八
同	十一年	八三八、六三九	三四六、八七九
同	十二年	九三一、一四七	三七三、九九七
同	十三年	一、一一一、四六二	七〇九、〇八一
同	十四年	一、二二一、一三八	七一九、八六六
同	十五年	一、二二〇、八六九	七八〇、七二六
昭和	二年	一、三〇四、二六二	八一三、六二〇
同	三年	一、三七〇、二九一	八五七、六一二
同	四年	一、五〇三、五八九	九四一、四七〇

廣告行數 大阪毎日新聞ならびに東京日日新聞の發行部數増加に伴ひ、その廣告の効果著しきをもつて、近時これを利用するものますます多きを加へ、したがつて廣告掲載量も逐年増進せり。明治四十五年以降掲載せる廣告行數左のごとし

大阪毎日新聞

年次	一ケ年分行數	一日平均行數
明治四十五年	一、二〇七、五九五	三、三三五
大正二年	一、三〇〇、七二六	三、五九三
同三年	一、三五三、五三二	三、七三九
同四年	一、二九五、六五五	三、五七九
同五年	一、六五三、五六九	四、五六七
同六年	一、九二八、五四〇	五、三二七
同七年	二、三七三、一八一	六、五五五
同八年	三、三二三、五〇五	九、一七九
同九年	三、八八四、三四四	一〇、七三〇
同十年	四、〇八一、一一三	一一、三五二
同十一年	四、五一一、九一一	一二、四六三
同十二年	四、一七二、五九九	一一、五二六
同十三年	四、七五四、六七五	一三、一三四

同	十四年	四、五二九、五二六	一一、五一二
同	十五年	四、三三〇、三八三	一一、九六二
昭和	二年	四、五九三、二三九	一一、六八八
同	三年	四、九三四、五四九	一三、六三一

一八

東京日日新聞

年次	一ヶ月分行數	一日平均行數
明治四十五年	五八四、〇九八	一、六〇〇
大正二年	六七四、四六八	一、八四七
同	六八四、四二九	一、八七五
同	六七九、〇七三	一、八六〇
同	八六七、四八三	二、三七六
同	一、〇三五、一六一	二、八三六
同	一、二五八、九七五	三、四四九

同	八年	一、七二三、〇一六	四、六九三
同	九年	一、九一五、三四五	五、二四七
同	十年	二、三三八、三四三	六、四〇六
同	十一年	二、六〇一、一〇一	七、〇七〇
同	十二年	二、五八〇、八四五	七、〇八〇
同	十三年	三、三八三、四六三	九、二六九
同	十四年	三、七八三、五七七	一〇、三六五
同	十五年	三、六八九、〇六二	一〇、一〇七
昭和	十一年	三、九九二、二六九	一〇、九三七
同	三年	四、二二七、五〇六	一一、五八七

九、社會奉仕

大阪毎日新聞社は毎決算期毎に利益金の一部を割いて別途積立とし社會奉仕に努め來れり、最近十三年間にこれ等社會公共事業のために支出せし寄附金額は百十三萬九千圓に達

す、その内譯左のごとし

學術研究調査費	八四、九二二、〇〇
教育獎勵費	五六、一九三、〇〇
救恤費	四六、三〇〇、〇〇
産業獎勵費	一八、八〇〇、〇〇
各種社會事業費	三九、一八六、五〇
運動体育獎勵費	二六、四六〇、三〇
藝術獎勵費	一五、七一一、〇〇
國際親善寄與費	二七、七八八、〇〇
各種記念事業費	二四、七五五、〇〇
慈善事業費	三二、八八九、六八
大毎慈善團事業費へ寄附	三七八、五三九、〇〇
大大阪記念博覽會剩餘金寄附	一四五、〇〇〇、〇〇
東日主催こども博覽會剩餘金寄附	二二、五九一、五五

二〇

東宮御成婚記念事業費

總計

一、二二〇、〇〇〇、〇〇
一、一三九、一三八、〇三

右のうち、東宮御成婚記念事業は、帝國學士院へ學術獎勵資金として拾萬圓寄附を初めとし、北樺太へ學術探檢隊派遣、南米ブラジルに移住者輸送、天王寺公園ならびに中之島公園に奏樂堂建設寄附、關西各市郡へ優勝旗寄贈、日本國民歌の懸賞募集等にして、その他なほ經費支辨をもつて日本分縣交通地圖を發行し、讀者に無代提供せり。しかして右の外、前記金額により、今日までに完成したる事業、または援助したる事業は頗る多く、その主なるものを擧ぐれば、大正二年より同六年に亘り行ひたる日本環海海流調査。伊吹山、立山、雲仙岳、富江、英彦山に建設したる高層氣象觀測所。和歌山測候所に地震計設置。大台ヶ原雨量觀測所電話線架設。東京帝大、京都帝大、東北帝大、愛知醫大、名和昆虫研究所、南方植物學研究所、徳川生物學研究所等における各種の研究。東京および大阪におけるセツツルメント・ハウス。結核豫防事業。癩豫防事業。高齢者、孤兒および盲啞保護事業、司法保護事業。内鮮融和事業。各種の朝鮮産業振興事業。動物愛護事業。公私の各大學始め各種の學校に對する寄附。各種運動選手の海外遠征費補助。立山に石室ならびに小屋の

二二

建設。古榴篇および滿洲語、印度語、馬來語各辭書の出版。全國青年男女講習會。各地の災害救恤たごへば關東大震災火災、但馬および奥丹後の震災火災を始め山陰、廣島、福岡、大分、熊本、長崎、大島、黃海道、平壤、京城等における風水害救助。ドイツ、オーストリア、ロシアにおける窮民孤兒の救濟。カナデイアン・ロッキー探検。大阪および堺市における小公園設置等件數二百六十三件に及べり

以上の外、なほ常に國家奉仕の精神をモットーとして各方面に活動せり、たごへば明治四十一年以來活動寫眞班を組織して社會教育に努め、或は國勢調査の宣傳、普選思想の涵養に資し、殊に 聖上陛下（當時東宮殿下）の御渡歐、近くは秩父宮殿下の御外遊にあたりては、かの地における御動靜を活動映畫にをさめ奉りて 天覽台覽に供し、また各地に公開して一般國民をして拜觀の光榮を得せしめしが如き、或は大正十五年以來毎年懸賞論文（五十年後の太平洋、新日本の宣言、われらのユートピア）を募集してその當選者を海外に派遣し、また選拔中等學校野球大會の優勝選手（昭和二年和歌山中學、昭和三年關西學院中學部）を米國西海岸地方の見學に送り、（本年は第一神港商業その榮冠を得）その他婦人見學團を組織し、或は歐洲視察旅行團を主催せるがごとき即ちこれなり、もしそれ大大

阪記念博覽會 照宮殿下御降誕記念こども博覽會のごとき、ごもに頗る意義ある事業として中外の賛同を博せしものなり

なほ大阪毎日および東京日日の運動課においては、各種の運動競技を奨勵し、或は海外より世界的選手を招聘してわが國民の体育發達に資しつゝあり。また講演課においては廣く全国的に講演會、講習會または夏季大學等を催し、活動寫眞班の活動と相まつて、耳より日より文化の普及向上を計り、特に學童に對する活動映畫の影響甚大なるに鑑み、率先教育映畫の研究を唱道し、斯界に裨益せるごとき少からざるを信ず

一〇、本年の新事業

大阪毎日新聞社は本年の新事業として東亞調査會の設置、國民健康増進運動、讀者相談部の新設を敢行せり。東亞調査會はわが國と利害關係の最も密接なる東亞の政局が、多年紛糾を重ねて變轉極まりなく、しばしばわが國の利益は侵害され、または危殆に瀕する情態に鑑み、かねて東亞の諸問題に多大の力を注ぎ來りし關係上、この際天下の識者を網羅して一大調査會を設け、十分に諸般の問題を研究調査し、わが國民の間に東亞に關する知

識を普及し、輿論の向ふところを誤らしめず、もつて極東の和平に貢献すると同時に政府當局者をして國策の遂行上遺憾なからしめんことを期するものにて、目下着々その準備を急ぎつゝあり。國民健康増進運動はすでに三月一日以來實行しをれるものにて、健康の最も尙むべきゆゑんを強調し、何事をなすにも「まづ健康！」てふ觀念を、あらゆる手段方法を用ひて全國民に深く印象せしめ、もつて國民の健康を増進せんとするにあり、今回はこれを最初の試みとして六ヶ月間繼續實行す。讀者相談部は時代の要求に應ずる社會奉仕の一にして、從來各種の事項につき、讀者よりの問合せ多數あるも、これに對し社内に特別の機關なきため遺憾の点少からざりしが、今回これを新設して一般讀者に對し、最も親切なる相談相手となり、また忠實なる公僕たらんとするものなり

一一、本社關係の二大事業

大阪毎日新聞社と關係ある二大事業は、財團法人大毎慈善團および同富民協會なり

大毎慈善團 大毎慈善團は明治四十四年十月大阪毎日新聞一萬號記念事業の一として設立され、社長本山彦一理事長として自來十有八年、本社の特働隊として専ら慈善事業並に

社會事業に盡力し來れり。今や三十萬圓の基金を擁し、近くは巡回病院を大阪、京都、奈良、和歌山、名古屋、岸和田、堺、西宮、郡山、東京、朝鮮、姫路の各地に實施し、ここに大阪には河川の便を利用して病院船慈愛丸を浮べ、或は聖德太子一千五十年忌に際しては奉讚大施療を行へる等その業績少からず、かの大正十二三年の朝鮮大洪水に鮮人一萬一千五百人、内地人八百八十人を救護せしごきその一例にして、その他關東、北但、奥丹後の大震災等いやしくも天變地異の大なるものあるごきに必ずわが救護班の活動せざるはなくかつては國境を越えて南滿洲までも出動し、鮮支人七千餘人を救療せしとあり、その他助産事業、兒童保護事業、釋放者保護事業、小額資金貸與事業等その活動せる範圍頗る廣く、なかんづく昨年中に大阪および東京を中心として大々的に施行したる盲人半盲人の開眼檢診事業は、本社發行の點字大阪毎日ごきにも盲人に對して再生の福音を傳へしものとす、創設以來今日まで同團の救療を受けしもの二十九萬六千二百七十八人(昭和四年四月末調)に達す

富民協會 富民協會は社長本山彦一が四十年間の勤勞に酬いるために、株主の決議により大阪毎日新聞社より贈られたる表彰金のうち金二十萬圓ならびにその所有しあたる土地

約二百六十五町歩を寄附して昭和二年設立したるものにて、本山自ら理事長となり、事務所を大阪府下高石町に置き、泉北、南河内、岡山の各地に試験農場を設け、農事改良の調査研究と農村副業の指導奨励とに従事す。すでにその事業として昨年農林省後援のもとに附近二府五縣を一區域とし、段當實收五石以上の米穀多收穫懸賞競作を實行し、一段歩七石五勺の實收を挙げ、わが國稻作技術の上に新記録を作りて斯界に一大センセーションを起せり。本年はさらに愛知、岐阜、三重、石川、富山、福井、廣島、山口、島根、鳥取の十縣を一區域とし、すでにその候補地を定めたり

一一、役員及職員

大阪毎日新聞社の現在役員は取締役十一名、監査役二名(一名缺)にして、最近社賓として學士院會員徳富猪一郎を迎へ、さらに顧問兼英文毎日監修として農、法學博士新渡戸稻造を招聘せり

取締役社長

勳二等

本山彦一

取締役副社長

正四位勳一等
法學博士

岡實

専務取締役 營業局長

高木利太

取締役

松本恣藏

同 主筆

高石眞五郎

同 大阪毎日編輯主幹

城戸元亮

同 東京日日營業局理事

吉武鶴次郎

同 大阪毎日編輯總務

奥村信太郎

同 東京日日編輯主幹

松内則信

同

櫻田松太郎

同

桐島像一

同 監査役

中村喜代槌

同

大久保豐米

社 賓

正五位勳二等

徳富猪一郎

顧 問

正四位勳三等

竹越與三郎

同

正五位勳四等
文學博士

谷本富

同 英文毎日監修

正三位勳二等
農學博士 法學博士

新渡戸稻造

大阪毎日新聞社の従業員は昭和四年五月一日現在三千六百三十六名（外に東京市内には販賣直營機關従事員約一千七百名あり）にして内譯左のごとし

大阪本社（大阪毎日新聞）

社員、準社員、（見習員を含む）

五五七名

客員、囑託

四六名

待命、休職、非職

八二名

外に

雇 員

一四二名

工 務 員（分工場および西部毎日を含む）

六〇一名

通 信 員

二四〇名

遞送雜役

一九〇名

給仕、小使、掃除夫

一三六名

支局事務員および給仕小使

一三三名

計

二、一二七名

東京支店（東京日日新聞）

社員、準社員、見習員

三七六名

社友、囑託

一九名

外に

雇 員

一二四名

工 務 員

三七六名

通 信 員

一一二名

遞送雜役

三〇

給仕、小使、掃除夫

一二二名

支局事務員および給仕小使

一一八名

計

六二名

通 計

一、五〇九名

三、六三六名

従業員は事業の膨張とともに逐年増加し、これを十年前即ち大正七年末の一千九百六十一名に比すれば實に九割弱の増加を見る、給料手當においても大正八年上半期(六ヶ月分)の總額四十七萬三千二百十二圓、即ち一ヶ月平均七萬八千八百六十八圓なりしもの、十年後の昭和三年下半期(六ヶ月分)においては總額貳百貳萬六千九百九拾圓に上り、一ヶ月の給與平均實に參拾參萬七千八百參拾壹圓に上れり

職員の養成については最も意を致し、毎年三月各専門學校以上の卒業生を選抜試験によりて見習生に採用し、これに講習を施して新聞事業必須の知識を附與し、或は時に速記技術者の養成所を設けしこともあり。一面工務員の養成に努め、輔導を置いて徒弟の教育に従ふ。またしばしば留學生を海外に派遣し、或は洋行員規程を定めて順次社員を洋行せし

むる等一にして足らず、現在職員にしてかつて歐米諸國に留學し、或は派遣せられたるもの七十二名(少數の南洋、印度、支那を含む)の多きに達す

従業員の健康保持についてはまた頗る意を用ひ、運動を奨勵し、一面社内に診療所を設け、その家族もまた隨時診療を受くるの便あり。かつ毎年全従業員の健康診断を行ひ、いやしくも疾病あるものあらば直に休養を命じて診療せしむ。近時驅蟲劑の一齊服用を行ひ成績頗る見るべきものあり、檢診ごとに病者大に減少せり

その他東西社員の交歡のためには、毎年春秋二季、名古屋、靜岡等中間地点に合同大競技會を開き、或は慰安のためには同じく春秋二期に遠足會を催すあり、また工務員全部の伊勢參宮あり、一般従業員の家族のためには、毎年期を定めて慰安會を行ふ

昭和四年五月十五日印刷
昭和四年五月二十日發行

大阪毎日新聞社事業概要

〔非賣品〕

大阪毎日新聞社編纂

大阪府豐能郡箕面村平尾四九九

發行兼印刷者 荒木利一郎

大阪府北區堂島上二丁目三十六番地

印刷所 株式會社大阪毎日新聞社

發行所 大阪府北區堂島上二丁目 大阪毎日新聞社

終